

ヒトによる貨幣の発明 忘れられた共同の原理

(総合研究大学院大教授 長谷川真理子)

毎日新聞 2016年10月30日

(文中の太字は引用者によります)



=望月亮一撮影

本稿では、ヒトという動物の進化史を基に、現代の社会が抱えるさまざまな問題を考えてみようとしている。ヒトは発明の天才だ。例えば、遠くへ行きたい、速く移動したい、楽に物を運びたいという欲求に対しては、車輪を発明し、家畜を使うことから始まって、やがては自動車、大型船舶、飛行機などを発明するに至った。ヒトは「AがあればBが起こる」ということを、単にAとBの連合として認識するばかりでなく、「AはBの原因ではないか」という、因果関係の推論ができる。そこで、自然界の現象の観察や、自ら行うさまざまな試行錯誤の中で、「こうすればもっとよくなるだろう」という工夫を重ねていく。そこで、技術がどんどん進歩していく。

貨幣というものも、そうやって人間が発明したものだ。元々は、「Xを持っているがYは持っていない、かつ、Xは手放してもよいがYを欲しいと思っている人」と、「Yは持っているがXは持っていない、かつ、Yは手放してもよいが、Xを欲しいと思っている人」とが物々交換をしていたのだろう。しかし、そんなうまく双方の欲望が合

致する相手に会うことは難しい。そこで、いくつかの段階を経て、どんなものでも交換することのできる、抽象的な価値を持つ「貨幣」が発明された。

交換と交易の歴史は非常に古く、何万年も前までさかのぼれるようだが、貨幣経済は進化史的に言えばごく最近のことである。どんなものにも変えることができる抽象的な価値とは、とんでもない発明だと思う。以前、東大名誉教授の岩井克人先生と話していた時、「貨幣の発明は言語の発明に次ぐすごい発明だ」とおっしゃっていた。その時は、そこまでのことはないだろうと軽く考えていたのだが、最近、やはり岩井先生のおっしゃる通りではないかと思ひ始めた。

それは、貨幣というものが、確かに人間の生活を変え、世界を見る目を変え、欲望のあり方を変え、人生観を変え、結局のところ人間性を変えてきているように思うからだ。貨幣経済の真ただ中で暮らしている私たちにとって、貨幣は当たり前の存在だが、ヒトという生物にとって、こんなものの存在は決して当たり前ではなかった。そして、大量の砂糖や脂肪の存在に私たちの脳も体もうまく対応できていないのと同じく、この貨幣という存在にも、実は私たちの脳はうまく対応できていないのではないだろうか？

ヒトが狩猟採集生活をしていた頃、ヒトは自分たちの手で集められる食料を食べ、自分たちの手で作れる道具や衣服を使って暮らしていた。できることは限られていたし、望めることには限度があった。まさに等身大の生活である。それ以上の世界の可能性を知らなければ、欲望にも限りがあった。「欲しい物」というのは具体的な物であり、それを手に入れる方法は限られていた。そして、ヒトはそのことを知っていた。

しかし、何にでも交換できる抽象的な価値が手に入るようになると、それ自体を得たいという新たな欲望が生まれる。「金の亡者」は、何か特定の物が欲しいから貨幣を得るのではない。ともかく貨幣をためることが何にもまして大事な目的なのだ。そこには限度がない。

また、何にでも交換できる抽象的な価値は、人間関係を買うことも、幸せな気分を買うこともできる。貨幣がない時には、人間関係を築いていなければできなかったことが、個別の人間関係抜きに手に入る。逆に、貨幣なしではほとんど何もできない。

そして、今では、貨幣を手に入れることは一つの職業につくことである。一つの職場で一つの仕事をし、その対価に貨幣をもらう。そうすると、ヒトは、自分が独立して生きていると思う。本当は、今でも狩猟採集生活時代と同じように、みんなで共同作業をすることで生きているのだ。農家がいなければお米も野菜もない。物流や商店がなければ、買うことができない。医者がいなければ病気を治せない。学校の先生がいなければ教育ができない。今でも、みんなとともに生き、生かされて暮らしているのだが、それぞれに貨幣が介在しているので、共同という感覚がなくなる。便利なものには必ず負の面がある。ちょっと立ち止まって考えてみた方がよい。

<この文書は、「備忘録」(下記URLをクリック)に掲載されているものです。>

<http://fileshelf.cocolog-nifty.com/blog/2013/04/post-a5de.html>